

学院部「本典概論」中西 昌弘

『本典』とは、浄土真宗の根本聖典であり、『教行証文類』とも『教行信証』とも略称されています。この書は、親鸞聖人が五十二才頃から書き始められ、七十四～五才の頃にほぼ完成したといわれていますが、細部にわたる推敲は八十才を過ぎてからも続けられています。そこには、浄土真宗の教えを二回向四法という独自の体系をもって明らかにされています。

阿弥陀さまの救済活動を「本願力回向」という言葉であらわし、その内容を往相回向と還相回向という二種の回向相に分け、往相とは私たちが迷いの境界である穢土から、さとの領域である浄土へ往生してゆくありさまということで、教・行・信・証の四法としてあらわされています。還相とは、さとの智慧を完成したものが、大悲を起こして、浄土から穢土へ還り、苦しみ悩む人々を救う活動をするをいいます。

それは、さとの智慧の必然として行われる大悲の活動ですから証果の悲用といえます。そして、往相・還相が、そこから出て、そこへ帰ってゆく根元である真実の如来・浄土の領域をあらわす「真仏土文類」が説かれて、真実の教えを体系的にあらわされた後、真実に背く邪義の宗教（外教）と、その邪義の宗教から真実の教えへと人々を導いてゆく方便の教え（聖道門・要門・真門）のあることを「方便化身土文類」として、広く説き示されます。

このように『教行証文類』は、教・行・信・証・真仏土・方便化身土の六巻に分け、真実の宗教と真実に背く邪義の宗教と、邪義から真実へと人々を導いてゆく方便の宗教とを体系的に明らかにされた聖典です。

一年を通して、この聖典をていねいにじっくりと読ませていただきます。

なお、テキストは『浄土真宗聖典（註釈版）』を用います。